

中国の女性——日中平和条約締結 20 周年記念石川県訪中団； 2000 年「世界女性会議」アクション交流派遣参加報告——

高 島 涼 子

はじめに

財団法人いしかわ女性基金は、1998 年 7 月に以下の目的のために参加者を募集した。

第 4 回世界女性会議で採択された 12 の行動綱領を、ジェンダーの視点からアジア共通の問題としてとらえ、国境を越えたパートナーシップの形成に向けて意見を交換するため、県内の女性を海外へ派遣し、アジアの一員として国際視野を持って、2000 年に開催される世界女性会議に向けて積極的に活動できるリーダーの養成を図る。

筆者はこの 2000 年「世界女性会議」アクション交流派遣事業（以下アクション交流派遣事業）に応募し、参加者に選ばれた。この事業は 1997 年にも実施されており、参加者 12 名がベトナムとマレーシアを訪れ、当地の女性との交流を深めている。

今年度の訪問先は中国であった。これは、日中平和友好条約締結 20 周年を記念する石川県訪中団が各種 10 団体で構成され、アクション交流派遣事業がその中の女性団体として中国を訪問することになったからである。この女性団体は石川県各種女性団体連絡協議会関係 10 名と派遣事業参加者 10 名、及び県職員 2 名の計 22 名で編成された。したがって 6 日間の日程は石川県訪中団としての性格と女性団体としての中国女性との交流を目的としたものとの両面をもったものとなった。日程は以下の通りである。

| 月日 | 時間 | 内 容 | 宿泊地 |
|----------------------------|---|---|--------------------------------------|
| 第 1 日目 11 月 8 日 (日) | 10:45 11:00 13:00 15:00 17:30 | 小松空港（女性団体）集合 小松空港（20 周年記念・訪問団）集合 小松空港発（チャーター便） 南京空港着 県訪問団全員での夕食会（中日友好会館） ～19:30 | 南京泊 中日友好会館 ☎001-86-25-8800 888 |
| 第 2 日目 11 月 9 日 (月) | 午前 16:30 17:00 17:30 | 南京の長江大橋、中山陵と明孝陵の見学 記念植樹 江蘇省政府要人表敬（女性団体代表） 石川県・江蘇省友好拡大記念交流大会（中日友好会館） ～19:30 | 南京泊 中日友好会館 |
| 第 3 日目 11 月 10 日 (火) | 10:00 午後 夜 | 江蘇省婦女連合会表敬訪問と女性代表との交流 全体会 10:00～10:15 班別意見交換会 10:25～12:00 江蘇省婦人活動センター、熊猫電子集団と南京女子中等学校の見学 江蘇省婦女連合会との夕食会 ホームビジット | 南京泊 中日友好会館 |
| 第 4 日目 11 月 11 日 (水) | 9:40 13:01 | 南京発 列車 Y215 蘇州着 寒山寺、虎丘、拙政園の見学 | 蘇州泊 天平大酒店 ☎001-86-512-626888 |
| 第 5 日目 11 月 12 日 (木) | 8:16 9:10 午後 夜 | 蘇州発 列車 T15 上海着 上海婦人連合会表敬訪問と女性代表との交流 豫園、玉仏寺と外灘の見学 上海雑技鑑賞 | 上海泊 千鶴賓館 ☎001-86-21-64700000 |
| 第 6 日目 11 月 13 日 (日) | 午前 12:30 14:30 17:00 | 上海博物館と玉製品加工場の見学 上海空港集合 上海空港発（チャーター便） 小松空港着 | |

高 島 涼 子

1. 行動報告

11月8日 13:30 小松空港発（中国東方航空チャーター便）

15:30 南京空港着

（現地時間：時差1時間）

18:00 県訪中団全員での夕食会

11月9日 8:30 南京長江大橋、中山陵、明孝陵の見学

南京長江大橋は揚子江にかかる橋で、鉄道と自動車道両用の二層式鉄橋である。上の車道は全長4589m、幅19.5m、下は複線の鉄道橋で全長6772m、1960年初頭に着工し1968年末に開通した、実に長大な、中国という国のスケールを痛切に感じさせる橋である。この橋が完成して、北京－南京－上海間が鉄道で結ばれることになった。

中山陵は辛亥革命の創始者孫文の墓で、広さ、大きさ共に中国人の孫文に寄せる思いが十分理解できるものである。棺の上の天井には国民党の党旗青天白日旗が描かれ、周りの壁には中華民国憲法が彫られてあった。

明孝陵は明の初代皇帝朱元璋（洪武帝）の墓で、参道には皇帝を守護する動物の像8対と武将の像がおかれている。

12:30 昼食

14:00 南京市六一幼稚園見学

1996年6月開設の新しい幼稚園（幼稚園という名称であるが、内容は日本の保育所と幼稚園を合わせた機能を持つ）で、敷地4Km²、建物3Km²、定員300名という大きなものである。教職員は厨房のクックまで入れて64名、そのうち保父は1名である。子供たちは週日この園に預けられ、週末に帰宅する週間預かりの幼稚園で、保育費は月に350元（日本円で1元＝15円として5,250円）、親が所属する企業からも援助金が出される。

週間預かりの意味としては、両親に働くことに専念できる環境を作ること、幼いときからの集団生活の中で国や社会に貢献する意義を学ばせること、子供を国の責任において育て上げること、などが考えられるが、日本とあまりに異なる状況に接して驚きが先に立ってしまった。案内の方は子供たちはテレビなど設備が充実しているので家に帰らなければならないといわれていたが、本当にそうなのだろうかと思ってしまった。

子供たちの寝室や保健室、絵画、ダンス、サッカー、音楽のクラスを

見学した。南京市一の幼稚園ということである。

16:30 県訪中団記念植樹

団長である谷本知事と李代省長他各団体の代表が鍬入れをした。

17:30 石川県・江蘇省友好拡大記念交流大会

11月10日 10:00 江蘇省婦女連合会表敬訪問と女性代表との交流

～10:15 全体会

～12:30 班別意見交換会

今回の訪中の主目的である女性団体との交流は、日本側を代表して石野和子石川県各種女性団体連絡協議会会長、中国側を代表して江蘇省婦女連合会主席洪天慧（Hong Tian Hui）の挨拶から始められた。その後、各種女性団体連絡協議会関係の10名と派遣事業参加者10名の2班に別れて意見の交流を行った。

まず婦女連合会という組織（後述）について説明があった。次に江蘇省内における女性の状況について解説された。

* 江蘇省の状況

江蘇省には3600万人の女性人口があり、省人民大会議員の25%以上を女性が占めている。副省長の一人が女性であり、部長クラスにも多く、かなりの進出が認められる。議員の女性占有率が25～30%と規定されている。

女性の就労条件は男性と全く平等である。憲法、労働法、婦人権益保護法等で女性の権利は守られている。江蘇省の労働者700万人中女性は362万人、46.5%を占めている。

* 一時帰休者問題を一例とする女性差別

しかし、数々の法律にもかかわらず、男尊女卑思想は残存しており、一部企業は女性を採用しない。また、現在一時帰休者が増えているが、江蘇省では労働人口の6、7%に上り、その中で女性が50～60%を占めている。一時帰休の理由としては高齢と技術不足があげられる。日本でいう職業紹介所があり、再就職のための訓練や資金を提供している。一時帰休女性の半数は再就職が可能で、主な再就職の職種は家事労働で、高齢者や働く母親の代わりに家事労働を提供している。

男女平等とはいうものの、スタート地点が大きく後退している女性は、特に計画経済社会から市場経済社会に移行後大きな不利益を被っている。政治面では積極優遇策として議員の女性占有率を規定したりして女性の進出を奨励できても、一般社会、特に資本主義の競争原理にさらされる経済活動においては、まだまだ男女平等とはいかないようである。その一端が一時帰休者の半数以上が女性であるという点に現れてきていると思われる。

* 高齢者問題

高齢者問題は中国も日本と同様かなり深刻な状況である。1986年に江蘇省は高齢者人口（60歳以上）が人口の12%を超え、高齢化社会に突入した。担当の委員会を設けて対策に当たっている。886万人の高齢者中、80歳以上が90万人、（60歳以上人口の16%）、100歳以上が1000人である。

高 島 涼 子

特徴としては、①高齢者人口が多い、②地区によって経済発展の度合いがアンバランスである、③高齢化の速度が速い、④80歳以上の高齢者が多い、の4点があげられる。

社会保障、優遇政策を実施しており、貧困にある高齢者には手当てが支給される。国家、社会、家庭が協力し合って取り組むとされているが、基本的には在宅介護で、子が親と同居して介護するのが一般的である。但し介護休暇の制度はないようである。農村では貧困が、都市では孤独感が高齢者の問題となっている。

*** 家庭内での女性の地位**

共働き家庭が圧倒的に多く、経済的な地位はほぼ同等である。但し家事は主に女性が担っている。ただ日本の男性よりははるかに家事の分担量は多いようである。実際訪れた各家庭でお茶を入れたり接待してくださったのはほとんど男性であった。一般的にはよく働く女性の方が男性より発言権はあるということであろうか。

*** 収入などについて**

計画経済時代は企業主と労働者の収入の差はほとんどなかったが、市場経済に移行後の今日では、約10倍の差がある。貯金をしている家庭は多く、定期預金の利子は4.8%である。

*** 教育問題**

義務教育は日本と同じ9年間で、江蘇省では100%の実施である。現在一人っ子の教育が大きな問題となっている。家庭教育センターで両親学校が婦女連合会によって約4万ヵ所で開催されている。一人っ子政策から起きる問題として、①子供に過保護となりがちな親、祖父母、②過度の子供に対する期待、があげられる。その対策として、子供に家事を分担させたり、貨幣の価値を教えるために新聞売りをさせたりしている親もいる。政府も子育てに努力している親を選んで表彰したり、彼らを通して広報活動を行ったりしている。

父親の育児参加は母親より少なく、0歳から3歳までは自宅で祖父母、お手伝いさんによって育てられるケースが多い。ちなみにお手伝いさんに支払われる賃金は月額300から450元程度（日本円で4500から6800円程度）である。

テレビの普及は都市ではほぼ全世帯に行き渡り、教育上の問題として物質志向や人命軽視などの傾向が子供たちに現れるようになったことである。対策として、CMに申告制度をとる、放送内容による時間規制などの処置が取られている。

*** 全体の感想**

全体の感想としては、女性解放運動がいわば上から下へという方向で政府の政策にのっとり進められている点が日本との一番大きな相違点といえるのではないかと、という印象を持ったことである。悲観的な見方をすれば、政府の政策が変更すれば、運動の内容も変更されることになる。次章で中国の女性達の意識についても触れるが、このような意識は国家が作り上げたもので、厳密に言えば一人一人がそれぞれの生活の中で勝ち取っていったものではないという言い方も可能かもしれない。

日本の女性解放は歴史的に見るなら、一定の成果を上げつつあり、女性は多様な生き方が可能と

なった。しかし、法制面でもまた現実でも就職や結婚、高齢者問題などでまだまだ深刻な差別は現存しているといわざるを得ない。法律作成に女性が参画する機会は少ないし、議会における女性占有率も先進諸国や発展途上国と比較しても非常に低い数字を示している。運動の方法も国家が主導して女性解放を進めている国から見れば、非効率的な方法を取っている。今回の女性団体の構成メンバーはそれぞれの地域の女性代表者と女性問題に積極的な関心を持っている者たちであるが、その活動はなかなか広がっていかないのが現状である。一方、国家の政策に左右されず、自らの意識において選択された決断はたとえ国家の政策が変更しようとも揺らぐことはない。

今回は婦女連合会という組織との交流なので政府よりの形を取らざるを得ないことは当然である。社会主義国家建設のために女性労働力を国家が必要とし、労働力確保のための啓蒙運動・教育・訓練組織として婦女連合会をとらえ、そういった組織との交流であるということを認識しておく必要がある。

どちらが正しいか、という問題ではなく、それぞれが置かれた場所で可能な方法で、運動を進めていくことが肝要であろう。今回の訪中で得られた成果はこの点を再認識できたということである。社会主義国家であり 12 億の人口を持つという、社会構造そのものがまず基本的に異なっているのであるから、違いは違いとしてそのまま受け入れあい、その上で共通認識を形成していくことが国際交流というものであろう。とりあえず江蘇省婦女連合会のメンバーとの交流の端緒が開かれたことを喜ぶたい。

午後 熊猫電子集团公司 (Panda Electronics Group Co.)、南京幼兒師範・中 専 学 校 (Nanjing Girl's Vocational School and School for Kindergarten Teachers)、江蘇省婦女兒童活動センター (Women and Children Activity Centre)、江蘇省婦女幹部学校を見学した。

熊猫電子集团公司

国内で最も知られているブランドのテレビ、オーディオ、通信設備等を製造する、従業員 7300 名、創業以来 62 年の江蘇省にある大企業の一つである。うち女性労働者は 2500 名で、組合長、資源部長、パンダ企業共産党支部主席が女性である。幹部技術者は 3000 名でうち 706 名、24%、経営トップグループ 11 名中 1 名が女性である。

南京幼兒師範・女子中専学校

訪問したわれわれを歌と踊りで迎えてくれたのには驚かされ、また感激させられた。

主に職業教育を行う義務教育終了後の中等教育機関である。17 歳から 19 歳まで在学する。幼稚園の教師、秘書、ホテル関係、伝統美術、音楽、英語等のコースを持っている。創立 100 年の歴史を持つ。優秀な学生は比較的容易に卒業後大学へ編入できる。コンピュータ実習は全員に課されている。英語は高学年のクラスで教えられる。卒業生の就

高 島 涼 子

職率は100%で、幼稚園やホテルからの求人が多い。伝統的な美術を習得するコースの卒業生の就職は比較的困難なものとなりつつある。我々を迎えてくれた学生たちは幼稚園の教師になるコースを取っており、歌や踊りはカリキュラムに組み込まれているので、特別練習したわけではないとのことであった。

江蘇省婦女児童活動センター

このセンターは江蘇省児童少年福利基金会 (Children and Youngsters Welfare Foundation of Jinagsu) という財団 (1984 年設立) によって建設、1988 年に科学技術宮、1996 年までに芸術宮、食堂、キャンプ場が建設された。以来このセンターは江蘇省の子供たちの活動、訓練、交流の中心となってきた。センター設立後 13 分野でトレーニング・クラスを開催し、4000 人以上の子供たちが学んできた。夏季・冬季キャンプや社会活動も実施している。この財団の憲章には、「子供たちは祖国の花」、「国家の希望」と述べられている。目的は、子供たちの健全な育成のための基金を募ることである。募金対象者として、一般労働者、農民、人民解放軍兵士、企業、軍隊、学校、大学、工場、香港、マカオ、タイ等の外国に住む中国人などがあげられている。江蘇省婦女連合会副主席孫燕麗はこの財団の副会長の一人でもあり、両者は密接な関係を持っている。

江蘇省婦女幹部学校

成人を対象とした中等専門学校で、中学・高校卒業者のための職業教育や労働者のための短期職業訓練などを行う。建築面積は 12k m²、在学生 400 名、短期技能訓練を受けるもの 2000 名の、女性人材を育成することを目的としている。

18:30 江蘇省婦女連合会との夕食会

20:00 3～4人ずつ別れての家庭訪問

～ 22:00 一般的に2LDKの間取りで、当初日本側が希望したホーム・ステイは困難ということが理解できた。省の部長クラスで、2寝室、台所、食堂というよりは食事を取るスペース、居間、バス・ルームのアパートで、家族2～3人で暮らすには十分な広さである。筆者が訪れた家庭は夫婦と子供二人の家族で、娘さんは結婚し子供が一人、息子さんは結婚はまだだが独立しており、ご夫婦と娘さん一家、息子さんと家族全員で迎えてくれた。通常の旅行者では不可能な中国の一般家庭を見学できたことは貴重な経験であった。

11月11日 10:10 南京発

13:30 蘇州着

定刻より30分ほど遅れて発車、3時間あまりの列車（軟座——2等車）の旅を楽しんだ。車窓からは収穫を終えた田園風景が広がり、江南地域の豊かさを忍ばせた。昼食後、寒山寺、虎丘、拙政園を見学した。ホテルは市の中心地からバスで30分以上もかかる郊外の開発地域にあった。蘇州のような古い都でも農地が都市に変えられていくありさまを図らずも目撃することになった。

11月12日 8:16 蘇州発

9:10 上海着

10:00 上海婦女連合会表敬訪問と女性代表との交流

上海市の概略について説明され、その後南京と同じように2班に分かれ、質疑応答となった。

* 上海市

人口1300万人中女性は650万人、女兒就学率は100%であり、大学生の40%、労働者の41%、専門職の43%、市レベルの人民代表議員中23%、県レベルの人民代表議員中30%が女性である。女性の企業主、医師、法曹関係者がそれぞれの職能団体を設立し、公安、警察、経済、金融関係にも女性は進出している。上海市副市長、人民代表団長、副団長も女性である。女性の平均寿命は79.21歳で、約5年男性よりも長い。上海市婦女連合会は政策立案にも参画している。

* 女性に対する暴力について

婦女連合会は被害に遭った女性を、女性裁判官や弁護士によって支援し、問題の解決に当たっている。日本側が聞きたかった被害者が公然と相談できる環境にあるかという点については明確な解答が得られなかった。被害もかなり深刻なものでないに対応しないような雰囲気は伺われ、対策が十分に取られてはいないような印象を受けた。

* 高齢者問題

上海市では60歳以上人口比は20%である。託老所、敬老院といった日本の老人ホームやデイ・ケア・センターに当たる施設があるが、介護は主に各家庭で行われている。介護におけるジェンダーはなく、子供たちが平等に行っている。アパート内で女性がグループを作って必要な介護を提供するシステムを持っているところもある。しかし、基本的に共働き家庭で、アパートは7階までの建物にはエレベーターがなく、高齢者にとってはかなり厳しい生活を余儀なくされているであろうことが推測される。家族で引き受けきれない痴呆や寝たきりの高齢者のための施設を区単位で建設してはいるが、現状では不十分である。政府は高齢者の健康促進を奨励しているが、一人っ子政策とあいまって問題は日本と同様あるいはそれ以上に深刻である。

上海市は開放経済政策が全国で最も進んでいる地域で、南京市との意識の差を多少感じた。経済に敏感であり、都市化が進んでいるということである。南京市と比較しても都市化の印象を強く受

高 島 涼 子

けた。都市化に伴い出稼ぎ労働者や住所不定の人々が合わせて600万人もいるということで、農村問題や環境問題と共に都市化の問題もかなり深刻なようである。上海の女性は強いといわれるが、意識にまで踏み込んだ交流ができなかったのが残念である。

12:30 昼食

13:30 豫園、玉仏寺、外灘の見学

18:00 夕食

19:30 上海雑技鑑賞

11月13日 9:30 上海博物館と玉製品工場の見学

12:30 上海空港集合

15:30 上海空港発（中国東方航空チャーター便）

18:00 小松空港着、解散

2. 中華全国婦女連合会について

この会は1949年4月3日に設立された、

全国の各界各層の女性が中国共産党の指導の下で更なる解放を勝ち取るために連合してできた社会大衆団体で、共産党と政府が女性大衆と連携する架け橋であり、靱帯である⁽¹⁾組織である。基本的な機能は「女性の権利を代表し、擁護し、男女平等を促進することである。」その任務は、

1. 女性が国家建設に参画するよう働きかけ、女性を教育、指導して、女性の自尊、自信、自立等全ての面で女性の資質を高め、女性を代表して政治に参画し、国家および社会事業の民主的な管理と監督に参画する。
2. 女性に関する法律、法規、条例の研究と制定に参画し、その実施の宣伝、推進、監督を行い、女性、児童の合法的な権益を擁護する。
3. 各民族、各界の女性の団結を強め、拡大し、祖国統一の大業を促進させる。
4. 各国の女性との友好交流を発展させ、相互理解と友情を深め、世界平和を擁護する。⁽²⁾

の4点である。これらを見ると、「社会大衆団体」とあるが、明らかに政府の外郭団体として、政策の一般大衆への浸透が最も大きな目的であることが伺える。

江蘇省では、婦女連合会は江蘇省婦女兒童工作弁公室という省政府部局の下部組織として位置づけられている。婦女連合会の職員は政府から給与を支給されており、各レベルの人民代表会議や政治協商会議⁽³⁾に代表を送り込んでいる。県レベル以上の婦女連合会の主任は一般に同レベルの人民代表大会と政治協商会議の常務委員に選出される。法律の起草にも婦女連合会は参画し、また政治分野における女性幹部の育成も行っている。婦女連合会が独自に行っている事業があり、これらの事業から得られる収益と政府からの支出が主な資金源である。事業としては、旅行社、雑誌社、

新聞社、出版社、児童・少年活動センター、などがある。

中国の人口は1990年末で約11億4340万人で、そのうち女性は48.48%を占め、約5億5430万人である。このうち全国の国営企業など企業で働く女性は5300万人で、全労働者の37.8%を占めている。この5億を超える女性たちのために組織されたのが婦女連合会である。専制王朝の下、封建的な家族制度に束縛されていた女性たちは中華人民共和国成立後、解放への道を歩み始めたが、共和国成立直後は非識字者も多く、女性の生き方も考え方も旧来のものに縛られがちであった。指導的な立場にあった女性達は、政府の方針を一人一人の女性にまで浸透させるための啓蒙運動を展開していく組織を必要としたのである。従って、婦女連合会は省、市、区、県、県以下、の各レベルで組織され、それぞれの行政単位と密接な関係を保っている。⁽⁴⁾

3. 中国の女性について

1911年3月、孫文によって始まった辛亥革命は中国の女性にとって2千年来の専制王朝——家族制度が崩壊したまさに解放の始まりであった。孫文の率いる国民党が作成した憲法では男女平等の項目は削除されたが、中国共産党は1928年の中京六全大会で「婦人運動についての決議」を採択し、農民、労働者、青年の女性について具体的な政策を規定している。1931年には中華ソヴィエト共和国憲法大綱で男女平等を規定、1949年10月1日、中華人民共和国が誕生する。その前3月24日から中国婦女第一次全国代表大会が開かれ、中華全国民主婦女連合会が設立された。初代の名誉主席には宋慶齡女史が就任している。中華人民共和国は、1954年、憲法を公布、その後1978、82年に改正された。この憲法に基づいて、選挙法、組織法、婚姻法、相続法等で男女平等の原則がもられている。⁽⁵⁾

清朝が崩壊するまで、女性は父、夫に仕える家族制度の犠牲者であったことはよく知られている。1950年代に入り、建国されたばかりの中国は、一人でも多くの労働者を必要としていた。それまで家庭内にとどまっていた女性にも建国のための労働という任務が課せられるようになった。当時の毛沢東の言葉による共産党のスローガン、「時代は変わった。男女とも同じになった。男の同士にできることは女の同士にもできる。」、がそのことを表わしている。このスローガンの背景には、労働の確保という国家の事情以外に、日中戦争から国民党との戦いの間、長征にも耐えて、苦しいときを共に戦った女性たちの存在があったことは間違いない。1950年代以降政府は前述した全国婦女連合会などを通して男女平等の政策を国民に浸透させていった。文化革命時代は、儒教などの封建思想による性別役割意識は徹底的に批判された。革命の担い手としての女性が強調され、男女平等意識は一層強固なものになった。その後経済開放政策がとられると、産業構造が変化し、また技術の革新が進んだこともあって、1980年代には「女性は家に帰れ」という主張が現れるようになる。経済効率優先の考えである。しかしこうした考えに同調する女性は少なく、特に都市部では男性の日本よりはるかに高い家事参加率と経済の発展により、女性は働きつづけ、また男女平等意識を持ち続けた。1997年に上海市普陀地区で行われた既婚女性に対する調査⁽⁶⁾では回答の2/3が男女

高 島 涼 子

平等を強調している。女性の社会的地位を家庭や家事にではなく、経済活動や社会活動の中に求めようとしている女性も多く、女性の意識改革は進んでいるようである。こうした女性たちは中国社会に存在する性差別にも敏感で、就職や一時帰休などで女性は差別されていると考えている。この調査から、都市化・産業化が最も進んでいる上海で、性別役割分担の考えを是とせず、経済上の必要性のみならず、自己実現や社会への貢献といった点から女性の労働をとらえている女性たちが多く存在していることが明らかになった。前章で述べた婦女連合会という組織を通してみるなら、国家主導の作り上げられた男女平等という像が浮かび上がってくるが、一人一人の意識調査からはまた違った像が描かれる。

中国女性との交流の席で、筆者が最も質問したかったことは、たかだか 50 年間あまりで封建思想を消滅させ、男女平等意識を社会に定着させたものはいったい何か、ということであった。毛沢東の「女性は天の半分を支えている」という言葉は有名であるが、この言葉や共産党のスローガンのみで人々の意識を根底から変えてしまうことができたとはどうしても思えなかったからである。筆者の問いに対する明確な解答は得られなかったが、封建思想や家族制度は現在も完全に消滅してはおらず、家事、育児や介護の主たる担い手は女性であって、ジェンダーは確かに日本社会と同じく中国社会にも存在していることが解答であると理解した。⁽⁷⁾

おわりに

中国と日本では国家のあり方、社会構造、政治組織、経済活動などすべてが根本的に異なるため、短時間のしかも通訳を介しての交流では大きな成果は望むべくもない。しかしそれらすべての違いを超えて、同性という共通点で相互理解は可能であるとも考えられる。歴史的に見るなら、20 世紀半ばまで封建的な家族制度の下で生きざるを得なかったという共通点も持っており、両国の女性たちの交流は、アジアの女性の解放という視点で見ると、重要なプロジェクトといえる。今回の交流がそれぞれの違いを違いとして受け入れ、相互に理解を深める端緒となれば意義あるものと位置づけられるであろう。このような機会を与えてくださったいしかわ女性基金に感謝申し上げたい。

注

1. 『中国の女性』中華全国婦女連合会著 アジア女性交流・研究フォーラム訳・発行 1993 年
(アジア女性シリーズ 1) p. 80

2. 同上

3. 政治協商会議とは正式名称を中国人民政治協商会議、略称を全国政協といい、

新中国が誕生する直前、中国共産党、民主諸党派、無党派、各人民団体、各界の人々によって合同で設立された。全国政協は中国共産党の指導の下に置かれた広範囲の代表性を持つ統一戦線組織であり、また中国政治体制の中で、社会主義における民主主義を拡大強化する重

要なルートであり、共産党の指導の下における複数党の協力を実行するための重要な組織
(『中国の女性』 p. 5)

である。なお、第1期全国政治協商会議は1949年9月に開催され、中国人民政治協商会議共同綱領として、女性は政治、経済、文化、教育、社会生活の各分野において男性と平等の権利を有すると規定している。(『中国女性史——太平天国から現代まで——』小野和子著 平凡社 1978年《平凡社選書 61》p. 234)

4. 『中国の女性』 pp. 64-67, 80-86
 5. 『中国女性史——太平天国から現代まで——』 pp. 233-263
 6. 「中国における既婚女性の性役割意識——最近の上海市における調査から——」横山美栄子、邱利華共著『九州女子大学紀要』34巻3号 1998年 pp. 63 - 74
 7. 『中国の女たち』ジュリア・クリステヴァ著 丸山静ほか訳 せりか書房 1981年(アジア文化叢書)
- 『中国女性の歴史』シャルル・メイエール著 辻由美訳 白水社 1995年